

ラテンアメリカ都市物語

= 第8回 =

階層社会が凝縮された 首都ボゴタ

幡谷 則子

植民地起源都市ボゴタ

コロンビアにおける都市建設も、他のスペイン植民地と同様、植民地行政・軍事基地としての機能を持つものから、宗主国向けの交易の中心としての機能を持つものへと発展していった。したがって、植民地時代の都市建設は、大西洋岸地域から開始された。大西洋岸都市サンタマリア（1510年）に始まり、今日の代表的観光都市である、サンタマルタ（1525年）、カルタヘナ（1532年）が続いた。次に、ペルー副王領から、コロンビア内陸部の探検に北上した征服軍によってパスト（1535年）、ポパヤン（1536年）、カリ（1536年）が建設された。

今日でこそ人口800万人を超える首都だが、ボゴタが内陸都市「サンタフェ」として創設されるのは1538年を待たねばならない。創立者はスペイン人、ヒメネス・デ・ケサーダ（Jiménez de Quesada）で、陸路から1537年、チブチャ語族のムイスカ族の棲む高原（サバンナ）に到達し、すでに展開されていた金、

エメラルド、岩塩などの採掘と交易も含めてこの一帯の征服を果たした。

「ボゴタ（Bogotá）」は先住民ムイスカ族が、その定住拠点を彼らの言語で呼んだ地名「バカタ（Bacatá）」に由来する。今日のボゴタ市のセントロは当時から行政・政治・金融の要であった。独立運動の立役者、シモン・ボリバルの銅像を中心に広がる中央広場（Plaza Bolívar）を囲むのは、支配層の権力の象徴であり、行政制度の中核である建造物：議会、ボゴタ市庁舎、最高裁判所、そしてカテドラルである。

ボゴタはこの中央広場を起点に、カレラ（carrera - 何番街）とカジェ（calle - 何番通り）による格子状街路を基盤に建設された。東方が丘に阻まれていたため、南北、西側に扇状に拡大していったのである。これが植民地起源都市の最初の姿である。

筆者が初めてボゴタを訪れたのは1985年、宿は5番街に近い19番通りに面したレンガの外壁で覆われたバカタ・ホテルであった。あれから30数年、セン



セントロの中央広場、カテドラル（写真はいずれも筆者撮影）



中央広場、最高裁判所（1985年、左翼ゲリラM-19との武力闘争にあい、再建されたもの）

トロは大きく変貌した。バカタ・ホテル跡地には、コロンビアで最高の高さを誇る「BD バカタ (Bogotá Downtown Bacatá)」がそびえ立つ。



BD バカタ・タワー 2016年に5年かけて竣工。67階建、高さ216m

20世紀のボゴタの発展 —セントロの密集化と富裕層の北部流出

植民地起源都市としてのボゴタは、カトリック教区で構成される中心市街区にスペイン人エリートが住み、サバナ後背地に住む先住民が使用人として往来する、という先住民と支配者との棲み分けを表現したものであった。中央広場に近いラ・カテドラル、サンタバルバラ、ラス・ニエベス、サンビクトリーノのバリオ（市街区）が、最初のカトリック教区として設立された。ボゴタの発祥の地とも言えるこれらの市街区の一部は、その後市内で最も退廃したスラム地区となり、市の再開発政策の対象となった。

ラ・カンデラリア歴史的地区には、今でもコロニアル様式の家屋が保存されているが、スペイン植民地からの独立後、近代化と工業化とともに急増した都市の労働者の住宅需要には追い付かず、セントロでは家屋を分割して借家人世帯を住ませるように

なり、過密化が始まった。さらに、市街化区域外の高台に、労働者向けの自助建設居住区が出現するようになっていった。

例えばコロンビア最大手のビール会社ババリア（1889年創立）の創立者は、住環境の悪いセントロの密集地区に住んでいた工場労働者の自助建設を支援した。これが労働者のバリオと称されるペルセベランシア（Perseverancia）である。間口4.3m、奥行き8mの典型的な日干し煉瓦造りの家屋であった。1914年には「労働の市場」と名のついた市場も建設されたが、今でもセントロの伝統的市場として機能している。



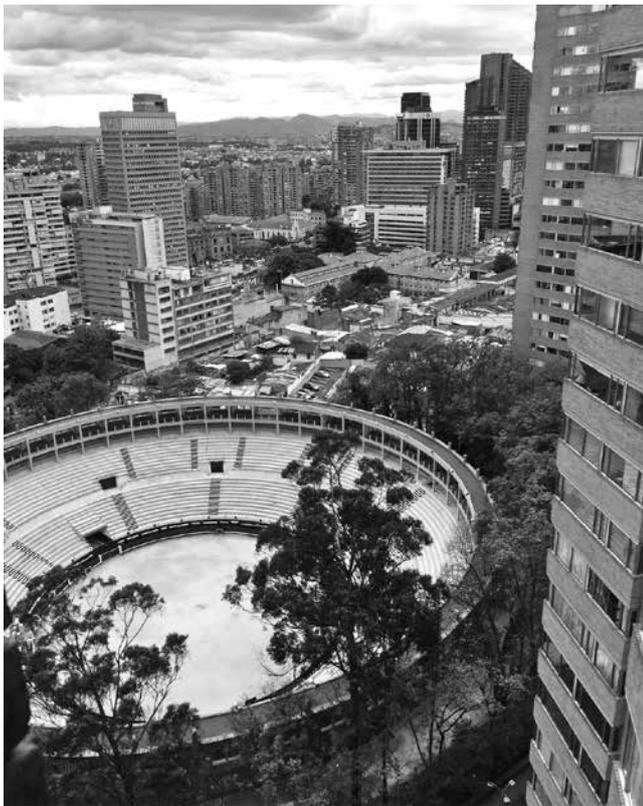
ラ・マカレーナ地区の高層マンションからセントロのオフィス街を臨む。正面4階建ての建物はコロンビア国立図書館

ペルセベランシアに隣接するラ・マカレーナ市街区にはボヘミアンな独特の魅力がある。今では「Mゾーン」(Zona M)として、ノルテ（北部）の高級レストラン街「Tゾーン」(Zona T)と並び、ボゴタ市内有数のグルメ地区として認識されている。5番街には、著名な建築家、サルモナ（Rogelio Salmona）が設計し、1965年から5年の歳月をかけて竣工した「公園のタワーマンション」（通称 Torre del Parque、正式名は Residencias el Parque）が佇む。赤レンガをふだんに用い、独特な螺旋型のカーブをもつ3つのタワーからなる集合住宅で、1976年にコロンビア全国建築協会賞を受賞した。セントロのシンボリックな建造物で、眼下にはサンタマリア闘牛場、プラネタリウムがあり、北側には国立公園が広がる。7番街に下りるとすぐ国立博物館がある。歴

史的地区ラ・カンデラリアも徒歩 20 分圏内で、観光拠点として絶好の位置にある住宅地である。アーティストや作家、ジャーナリスト、学者などが好んで住む地区である。



ラ・カンデラリア歴史的地区



Torre del Parque からサンタマリア闘牛場を望む

セントロの密集化が進むにしたがい、中上流階級は、北へと転出していった。他方、セントロに間借りする労働者世帯は、家族構成の変化にともない、東南部の市街化整備地区外に安価な宅地を購入し、自助建設によって住居を得るようになってゆく。

こうして、ボゴタでは富裕層の住むノルテと貧乏人の集まるスルという社会階層別の棲み分けが顕著

になっていった。コロンビアでは都市部を中心に、居住区ごとに住宅の建築資材からみた物質的状态、都市計画における立地、基本的公共サービスの受給状況、住宅内の密集度などの指標によって階層分類化されている。この制度は 1990 年代に法制化され、ボゴタ市は 1 位（最下位）から 6 位（最上位）までの 6 階層に分けられている。居住区ごとに階層が決まっているため、市民のステイタスを計る指標にもなるわけだが、そもそもは、公共サービスの料金設定の基準として導入された。すなわち、上層に高い基本料金が設定され、その分下層の料金設定は相対的に低い設定になっている。傾斜配分による階層間助成のしくみである。

階層 5 や 6 に属する人は全体のごく少数であり、社会的ステイタスとなっている。ボゴタ市民のおよそ 8 割が 2 位から 4 位に属する。階層別住み分けが顕著なボゴタは、コロンビアの階層社会の縮図といえるのである。

ボゴタの過密化と高層化

国立統計局によると、2018 年 2 月 11 日現在のコロンビアの推計人口は 4,962 万 6,917 人、うちボゴタ市の人口は 818 万 1,047 人である。30 年前の 1988 年の総人口は 3,276 万 7,110 人、ボゴタ市人口は 464 万 8,463 人であった。したがって、過去 30 年でボゴタの人口は 1.75 倍になり、コロンビア総人口に占める割合も 14.2% から 16.5% に拡大したことになる。

これまで、首都ボゴタと合わせて 100 万人を超える地方都市メデジン、カリ、バランキージャを中心に四大都市圏の均衡的都市化形態というのがコロンビアの都市化パターンとされてきたが、「首位都市への一極集中型」に近づきつつある。



ヒメネス通りと BRT トランスミレニオ

モレノ市政（2008年～11年）期、BRTトランスミレーニオの第三期路線拡張事業が受注会社との汚職によって頓挫したこと、長らく26番通りから国際空港に続くエルドラード通りの整備と周辺地域の再開発が遅れた。今は空港のリニューアル工事もほぼ完成し、周辺には米系資本の高級ホテルが軒並み進出している。米国大使館が近いためでもある。一方、有数の私立大学が集中する黄金博物館からヒメネス通り界隈の再開発も近年拍車がかかっている。

2016年に左翼ゲリラ、コロンビア革命軍（FARC）との和平合意が調印され、紛争後社会の到来が現実味を帯びてきた今、コロンビアへの海外投資は息を吹き返した。1990年代以降、ノルテに移ったビジネスの中心が、空港や行政機関オフィスへの近接性という利便性によって、セントロへの回帰の兆しがみられる。

東側を丘陵地に隔てられているボゴタ市は、高台にも新規宅地開発はみられるものの、現在の市街化区域内には新規宅地造成に参入できる土地は極めて限られている。セントロの再開発熱は続いているが、ボゴタ中心部はもはや高層建築によって居住スペースを増やすしかない。Portafolio紙（2017年2月18日：<http://www.portafolio.co/mis-finanzas/vivienda/el-70-de-la-vivienda-de-bogota-esta-construida-en-altura-503480>）によると、ボゴタ市内で供給される住宅建設の高層化は止まらない。ボゴタ市地籍局によって実施された不動産センサスによると、2016年に建設された不動産のうち70%が高層マンションで、新たに供給された209万6,346戸のうち、約7割がセントロを含む2から4の社会階層地区であったという。

コロンビア建築行政会議（CAMACOL）の統計によれば、国内で供給される住宅の86.2%がマンションなどの集合住宅である。ボゴタ以外の主要都市でも、すでに新規宅地建設用地が不足する場合は、高まる需要に既存の宅地面積で対応するために必然的に高層化の傾向が見られる。

セントロの再開発によって排除される人々

ジェントリフィケーションとは、都市の貧困地域や退廃した地域を再開発することで、他の階層が流入し、再開発前の住人であった貧困者が排除される現象のことを言う。ボゴタのセントロでは、まさにこの現象が起こっている。行政区分「サンタフェ」地区に属するセントロのラ・カンデラリア歴史的

区には、文化的価値を守ろうとする保護政策によって市街区保存に公共投資が進んできた。ここには外務省庁舎とその向かいには、国が誇るコロン劇場もある。他方、同じサンタフェ地区内の10から14番街と6から12番通りに広がる一帯は、市内で最も治安が悪く、違法取引の巣窟として多額の金銭取引が行われることで有名となった、通称「カルトゥッチョ」（カラーの花の意。独立当初、この花が栽培されていたことに由来する）地区があった。20世紀、一時は商業地区として栄えたが、1940年代に10番街拡張工事のため、サンタ・イネス教会と周辺の常設市場が解体されることになった。続いて1948年のボゴタ騒乱（自由党改革派の政治家、ガイタンの暗殺を引き金に起こった暴動で、「ラ・ビオレンシア」内戦の契機となった）以後、治安悪化を懸念した富裕層がノルテへ移転したことから、セントロが荒廃したが、この一帯もその影響を受けた。その後、内戦中に地方からボゴタに避難した人々や貧困層が住みつき、既存の家屋は長屋化していった。同時にマリファナを中心に麻薬密売が横行し、廃品回収業や路上物売りなど、都市の雑業と非合法売買に関与する層が集積する地区に変貌した。

カルトゥッチョ地区はスラムであると同時に、闇ビジネスの集積地であり、麻薬密売と廃品回収業を中心に、莫大な金銭の取引が行われてきた。実際、麻薬中毒から抜け出せず、インフォーマルなりサイクル稼業で日銭を稼ぐしか他に生き延びる手だてがない多くの人が集まっていた。人道的観点から、市の社会プログラムをはじめ、NGOや宗教団体などがこの地域の「再生」をめざして関与してきたが、抜本的改善には至らなかった。景観や治安、公衆衛生の観点から、歴代市長の頭痛の種であった。

この状況に大ナタを振るったのが、ペニャロサ市政（第1期:1997～2000年）であった。21世紀への移行期に、ボゴタ市の貧困撲滅を旗印に、様々な再開発事業に取り組んだ。「脱周縁化」政策は、南部不正規地区の正規化プログラムであった。トランスミレーニオを導入して交通渋滞の緩和に取り組み、ノルテからスルまでを横断的につなぐ市内交通網を拡大したことは評価に値する。しかし、カルトゥッチョに住む人々の社会復帰政策は難渋した。結局カルトゥッチョ地区は解体され、住民は退去を強いられたが、作業は難航した。同地区がさら地になったのは、皮肉にも2005年4月、左派政党から就任したガ



ボゴタのスルに自助建設された住宅



解体指令が出た後のカルトゥッチョ地区

以南にはめったに足を踏み入れることはない。闇経済と犯罪組織ネットワークが大都市に巣くうことは深刻な問題である。犯罪は裁かれるべきだが、そこに陥る若者層があり、潜在能力があっても社会的上昇への可能性や選択肢が阻まれた社会階層構造があることに目を向ける必要がある。歴史地区の観光振興、有数大学が集中する学園都市地域構想、国際空港の刷新の影で、置き去りにされた人々がいる。ジェントリフィケーションがもたらす社会的排除の動態は、ボゴタに限ったことではない。東京オリンピックを控える日本にも同じ問題が存在することを、ボゴタの今の様相から読み取ることができる。

(はたやのりこ 上智大学外国語学部イスパニア語学科教授)

ルソン市政期中で、跡地には「第三ミレニアム公園」が建設された。元カルトゥッチョ住民を自分のバリオに受け入れようとする市民はなかった。その後の左派市政も人道的支援の継続や社会復帰プログラムへの導入に失敗した。当時およそ1万人とも推計されたカルトゥッチョ住民は、行くあてもなく町中に離散した。

問題の本源的解決はなく、結局数ブロック先に再び同様の地区が形成された。これが「エル・ブロンクス (El Bronx)」である。大統領官邸からは、800mほどの地点だ。ここに3,000人余りの路上生活者が生活していた。左派市政後に返り咲いたペニャロサ第二市政において、2016年5月、2,000人の警察官が動員され、軍の後方支援も受けて強制代執行が行われた。だが1年後には、別の4地域が、「次のブロンクス」になる可能性が危惧されるようになった。高層マンションが林立する表（おもて）のセントロの影で、マフィアが支配する闇経済は一掃されない。

外国人や中流以上の人々は、セントロの歴史地区



『エルドラードの孤児』

ミウトン・ハトゥン 武田千香訳 水声社
2017年11月 188頁 2,000円+税 ISBN978-4-8010-0291-3

東京外国語大学大学院でブラジル文学・文化を講じる武田千香教授が編纂する「ブラジル現代文学コレクション」の最初の刊行（現時点では6点が既刊・配本予定）。著者は1952年アマゾン河中流の大都市マナウスでレバノン系の両親から生まれ、スペイン、フランスで高等教育を受け、アマゾナス連邦大学、カリフォルニア大学で教職を務めた。

マナウスは19世紀後半に欧米での自動車・自転車の利用拡大でタイヤ用に生じたゴム需要の高まりにより、周辺の密林で採取する天然ゴムの輸出で財を得た。本書は、このゴムブームに乗って財産を築きながら、1912年に競争に敗れ急死したアルマンドとその息子で根拠のない夢を追い求めて親の資産を食い潰してしまったアルミンの生き様を、マナウスとアマゾナス州第2の都市パリンチンス（マナウスから船で20時間余かかる。旧名ヴィラ・ペーラ・ダ・インペラトリス、毎年6月の「ボイ・ブンバ」の祭り知られている）を舞台に、16世紀に黄金の国を夢見て南米に侵入しインカを征服したピサロ軍の一員のオレリャーナが、数十人の部下とともにこの大河を下り、途中ギリシャ神話の女人族アマゾネスと見紛う女戦士を目撃したというエルドラード伝説に始まる神話世界と、アマゾンで近代に生きたアルマンド父子と人々の生活とを交錯させた家族史的な物語。

（桜井 敏浩）



『老練な船乗りたち - バイアの波止場の二つの物語』

ジョルジ・アマード 高橋都彦訳 水声社
2017年11月 372頁 3,000円+税 ISBN978-4-8010-0292-0

ラテンアメリカは混血の人たちが大部分を占める。先住民インディヘナの土地にスペイン、「ブラジル現代文学コレクション」の2巻目は、世界で最も知られたブラジルの小説家であるアマード（1912～2001年）の単・長編2作。アマードは、故郷の東北地方のバイア州を舞台に前半は時代を反映して政治色の強いプロレタリア小説を書いてきたが、後半は政治臭が無くなり本書のようなユーモア、民衆との一体感を基調とするブラジル色の濃い小説を発表した。

『キンカス・ペーホ・ダグアの二度の死』は、バイア州の州都サルヴァドールの海に身を投げて死んだという愛称キンカスの棺を前に集まった近親、友人たちの虚実をないまぜにした会話が飛び交う。『遠洋航海船長ヴァスコ・モスコゾ・ジ・アラガンの物議をかもした冒険談についての紛れもない真実』は3話から成り、郊外のペリペリの町でヴァスコが退職した船長を名乗り冒険談と功績を語り町の名士になるが、これまで名士だった税務官シッコが元船長という身分を怪しむ。シッコが調査したヴァスコの半生は、遠洋航海船長の免許状をかりうじて取得したものの、財産を減らしてこの町に移ってきたものであった。次第に彼が船長だったことさえ怪しむ人が増えてきたところで、緊急入港した沿岸航路船の急死した船長に代わりヴァスコに北のアマゾン河口の都市ベレンまで船の指揮が依頼される。ヴァスコ船長は船客たちに冒険談を語り、それに魅せられた一人旅の女性と恋愛・結婚話にまで進むが、ベレン入港時の繋留の不手際で馬脚を現し婚約の話も破綻する。しかしヴァスコはその夜襲来した暴風雨への対処で汚名をそそぎ、ペリペリに意気揚々と戻ることが出来た。

アマードの広い見聞、見識、当時の政治状況を含む考察が随所にエピソードとして散りばめられ、さすが文豪ならではの味わい深い小説となっている。

（桜井 敏浩）